

「乳」からみた近世大坂の捨て子の養育

沢山 美果子*

はじめに

著者は先に、近世の捨て子の実像への接近を意図して『江戸の捨て子たち その肖像』¹を著したが、その過程で気になったことの一つに、「乳」をめぐる問題がある。捨て子の多くは乳児だったため、捨て子がみつかるはずなされるのが、乳を与えることだった。そのことは「乳付け」「乳給させ」「乳手当」といった言葉で表現されている。では誰が捨て子に乳を与えたのかといえ、乳のある女性であることは言うまでもない。また乳があることは、貰い手の側の大事な条件の一つであった。いわば乳は、捨て子養育の要に位置し、捨て子のいのちは、何よりもまず乳によって維持されたのである。そこでは誰の乳かは問題ではなく、母の乳こそ価値があり、実の子に対する「実母哺乳」が母性愛の象徴とされる近代社会²とは大きく異なる世界が広がっていた。とするなら、女の身体と子どものいのちの結節点にある乳に焦点をあてて捨て子養育の問題を考えることは、近世社会のいのちの関係史に接近する手がかりともなるのではないだろうか。

本稿では、以上のような観点から、捨て子の命綱とも言える「乳」に焦点をあて、捨て子養育の問題に接近してみたい。手がかりとするのは、近世大坂の捨て子関係文書である。まず1節で近世の「家」の維持・存続と子どものいのちとの関係や捨て子の問題にふれた先行研究を手がかりに捨て子養育への接近の視点を探り、2節で「乳」に焦点をあてることが近世社会の捨て子に接近する上で持つ意味を提示する。そして3節では、近世大坂の捨て子をめぐる史料群と、そこから見える捨て子養育のプロセス、さらに、その背後にあった「家」と女性、子どものいのちをめぐる状況を概観し、4節では誰が捨て、誰が貰ったのか、その詳細な実態がわかる個別具体的な事例を乳に焦点をあてて取り上げ、捨てる親、貰う親の事情を分析する。最後に、以上の分析を通し近世大坂の捨て子のいのちと養育をめぐって何がみえてきたのかを整理することで結論にかえる。

1. 「家」と捨て子養育への接近の視点

近世社会における捨て子のいのちへの接近の視点を明らかにするために、「家」の維持・存続と子どものいのち、捨て子の問題にふれた主な研究を取り上げ、そこでの視点を整理することが

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科客員研究員

ら始めたい。

近世社会における「家」の成立と子どもの問題について大藤修は、17世紀後半から18世紀にかけての「家」意識の成立が、「子どもを家を連ねていく存在として意識する契機」となったとともに、「家の再生産に必要な範囲内に家族員数・産児数を人為的に調節する」「家族計画意識」を「芽生え」させたと指摘する³。また、17世紀後半の生類憐れみ令以降問題となった捨て子の背景には、都市細民層の形成があったが、彼らは特定の職業を代々継承するような家を形成しておらず、生活も不安定で、独自に町共同体を形成して相互扶助に支えられることもなく、「子供を家を連ねていく存在として意識することもなかった」ため「捨て子が発生しやすかった」と捉える⁴。大藤の指摘は、「家」の成立と人々の子どものいのちへの意識との関係や、捨て子の背景としての都市下層民の「家」意識や共同体のあり方を視野に入れるべきことを示唆するものである。

大藤の研究が「家」に焦点をあてたものであったのに対し、その根底にある近世社会における「いのち」の問題に大きな焦点をあてたのが倉地克直の『徳川社会のゆらぎ』⁵である。倉地は、18世紀徳川日本の底流に流れていたものは、「家」とともに生きようとする人々の意志と努力であり、「家」存続への意欲の高まりは、成年男子のみならず、女性・子ども・老人の「いのち」を大切にする知恵と工夫を生み出したとする。本書は、近世社会のいのちは何よりも「家」との関係によって価値付けられ、守られたという近世社会における「いのち」の歴史性を指摘する。さらに近世社会における捨て子の養育は、町、村、藩の重層的な捨て子救済システムにより保障されたことや、捨て子は、世間という公共圏に子どものいのちを委ねる行為であったなど、いのちを保障する場の重層性やいのちをめぐる公共空間に眼を向ける。この倉地の指摘は、捨て子の問題に接近するには、捨て子のいのちと「家」や公共空間との関係、捨て子養育の場の重層性、当事者の意識への着目といった視点が求められることを示唆する。

最後に取りあげるのは、捨て子研究に先鞭をつけた菅原憲二の研究⁶である。もっとも菅原の研究は「捨て子養育制度の展開を具体的に検討することによって、近世京都の町のあり方、更には都市全体の再生産のあり方、特質を解明すること」を目的としたもので、捨て子そのものを対象としたものではない。しかし、捨てる側と貰う側の関係について、「家」継続の条件の一つは子孫に恵まれることだが、子どもがない場合、下層民には養子を迎える手段も養育料もなく、他方、貧窮な階層ほど子どもは貴重な家内労働力であり、子どもを多く必要とするが、子どもが多すぎた場合は養育困難となり、養子に出すにも持参銀も出せない。この下層の両者を取り結んだのが捨て子養子であるという興味深い仮説を提示している。菅原の仮説は、捨てる、貰うという両極に位置するように見える都市下層民の行為を、彼らの「家継続への願い」の二側面としてみる点で示唆的である。また、この仮説は、都市下層民の「家」意識や独自の町共同体の未形成が捨て子を生み出したとする大藤とは見解を異にするものであり、そこには都市下層民における「家」意識の成立と捨て子の関係をどうみるかという課題が浮かびあがる。

本稿では、これら先行研究の指摘に学びつつ、捨て子と「家」の維持・存続との関係、捨てる側と貰う側の関係、捨て子養育の場の重層性や、いのちをめぐる公共空間といった、捨て子のいのちをめぐる関係性に留意しつつ、捨て子養育の問題への接近をはかりたい。では乳に焦点をあてることには、どのような意味があるのか、次に、そのことについて考えてみることにしよう。

2. 子どものいのちと女性の身体の結節点としての「乳」

近世社会にあって、産まれた赤子のいのち、また捨て子のいのちを保障するうえで欠かせないのが、女の身体から分泌される乳であった。乳は、民衆にとってはもちろん、人口の再生産をはかる藩にとっても重要な位置を占めていた。そのことは、近世後期の出産管理政策や捨て子禁止政策のなかで、赤子や捨て子養育のための「乳手当」や、催乳薬の支給など、乳をめぐる様々な処置が重視されていたことからもうかがえる⁷。その意味で乳は、近世社会の子どものいのちをめぐる環境を具体的に明らかにする重要な手がかりとなる。

しかし、近世社会の授乳に関する研究は、歴史人口学の視点から、近世の長期授乳と出生抑制との関係を指摘した鬼頭宏の「前近代日本の授乳と出生力」⁸以降、近世の“乳のネットワーク”あるいは“乳縁社会”とでも名づけられるような、赤子のいのちをめぐるセーフティネットの存在を指摘した氏家幹人の『江戸の病』(2009年)⁹が登場するまで、ほとんどなされてこなかった。ただ、北山修編の『共視論 母子像の心理学』(2005年)¹⁰では、近世の浮世絵には乳房を出して乳児に与える授乳の絵が数多く見られるのに対し現代日本の親子画では激減しているという興味深い指摘がなされている。

確かに、浮世絵には授乳の絵が頻繁に登場する。しかもここでの授乳は、近代の哺乳瓶の登場で広まった横抱きではなく縦抱きである。乳を吸う乳児の視線は、母ではなく外の何かに向けられ、授乳が閉ざされた母子の空間でなされるものではなかったことをうかがわせる。図1に、天保期頃の作とされる「子宝遊」を示したが、その解説には「欧米文化では乳房は女性の秘所。日本では哺育器の意識が強く人前での授乳も行われた」とある¹¹。また、そこに描かれた乳を吸う子どもは、明らかに一歳を過ぎており、近現代の授乳とは異なる様相がみてとれる。

しかし、近代以降、授乳という行為は家庭内の実の母と子の問題として受け止められていく¹²。また人間の一生のなかで授乳期間は、母親にとっても、子にとっても短い期間の出来事となったことに加え、人口乳という母乳の代替物の登場



図1
子宝遊
歌川国貞 天保頃

は、前近代において乳が赤子のいのちにとって持っていた重要性を忘れさせるものであった。明治9年（1870）に東京で最初に売り出された牛乳の名称が「乳母いらす」であったことは、乳が何よりも実の母に限定される「母乳」となっていく時代の始まりを象徴する。ちなみに、近世には「母」と「乳」を結び付ける「母乳」という言葉はなく、乳は、「女の乳」や「人乳」と表現され、「乳」が母の乳か否かにこだわる意識は弱い。それに対し、近代には、「母乳」が強調され、母以外の女の乳は差別化される一方で、「母乳」は「母性」や「賢母」の象徴とされていく。そのことは、近代の乳の出る薬の広告（図2）からもみてとることができる。ここには、実の母と子の、乳を介した結びつきが描かれ、「母乳」は「賢母」の証しとしての位置を占める。



図2 乳の出る薬の広告
『婦人世界』大正11（1922）年6月

しかし、近世社会にあって乳は、何よりも子どもの命綱としての即物的な位置を占めていた。近世社会の飢饉の経験をもとに描かれた飢饉図の母子像は、そうした乳の位置を象徴的に示すものである。飢饉図の重要なモチーフとなったのは、死んだ母の乳房にすがる乳児の姿である。例えば天保4年（1833）の飢饉の様子を描いた長谷川伊三郎の『天保飢図集』（図3）は、秋田県北部（現、鷹巣町）にいた長谷川自身の見聞にもとづくものであるが、そこには「飢瘦レテ野外ニ伏転ヒ死スル躰児子死にたる母の乳を呑風俗」が描かれている。



図3 長谷川伊三郎『天保飢図集』
出典：『民間備荒録 江戸時代の飢饉と救荒書』
一関市博物館、2002年

また雪溪が福島の会津地方の天明の飢饉の様子を描いた江戸時代後期のものとされる『天明飢饉之図』にも息絶えた母の乳を吸う赤子の姿をみることができる¹³。

これらの図は見るものに、死んだ母の乳を吸う赤子もまた、そう遅くない時期に死ぬことを予測させる。死んだ母の乳を吸う赤子の姿は、飢饉のなかで実際に見られた光景であったのだろう。しかし、その赤子の姿が、飢饉図のモチーフとなっていることは、近世社会にあって、乳が赤子の命綱であったことを象徴的に物語る。

近世の捨て子養育でも、捨て子が発見された場合には、すぐさま「乳手当」がなされ、農村の場合は多く貰い乳が、都市の場合は乳持ちの女の乳が与えられた。しかし乳の重要性は他方で乳の商品化と乳で生計を立てる人々を産み出し、そのことが子捨ての原因ともなった。

塚本学は、乳の商品化が捨て子をもたらしたことについて「御仕置裁許帳」に記載された実子

捨ての一例をあげている。元禄2年（1691）春、江戸永富町二丁目、四郎次郎店の七佐衛門は暮らしに困り、一両二分の金を受け取り女房を乳母奉公に出し、当歳（数えの1歳）の娘を相店仁兵衛方に里子に出した。しかし、女房を離縁した仁平衛が、乳がないという理由で子どもを返してきたため、困った七佐衛門は返された子を捨てたのである。塚本は、里子に出すときに支出されたはずの金額は恐らく一両二分の半額以下であり、「この差額が生活費ともなれば、悲劇を生む原因ともなる」こと、「女房の死亡等の際乳母を雇うことは、子の生命を一番安全なものとする反面、乳母奉公に出た女性の家の側に捨て子を生む条件をつくり出すものともなる」と指摘している¹⁴。

この事件の10年後の元禄12年（1699）に出された井原西鶴の『世間胸算用』の「三 小判は寐^ね姿^{すがた}の夢^{ゆめ}」は、「捨るはむごい事」なので、どうか手塩にかけて育ててほしいと夫に頼み、乳のみを残し妻が乳母奉公に出る話である。そこには、口入屋の老婆の、「こなたは乳^ちぶくろもよいによつて、がらりに八拾五匁、四度御仕着せまで。かたじけない事とおもはしやれ。雲つくやうな食^{めし}たきが、布^{ぬの}迄^{まで}織^はん^きまして半季が三拾式匁。何事も乳^ちのおかげじやと思^{おも}はしやれ」（お前さんは乳房がよいので、前金でそっくり八拾五匁給金を渡して下さるし、その上四季のお仕着せまで下さる。有難いと思わっしゃるが良い。雲つくような大女の飯炊きが、木綿機まで織って、半季の給金がやっと三十二匁です。何事も乳^ちのおかげだと思わしやれ）という言葉が記され¹⁵、乳持ち奉公は、身一つで奉公が可能なうえ給金も良かったことがうかがえる。

近世後期に記された近世風俗史の書物『守貞謾稿』の「乳母」の項目には「ただ三都とも乳母のみ給料のほかに服および諸費を与ふ、けだし京阪にては乳母の児存亡ともにその児を養はず、またその費を与へず、江戸にては乳母の子存する者を好しとし、これを養ひの費を与ふ」¹⁶とある。この記述からは、乳母の待遇は他の女奉公人に比べて良かったこと、また江戸では子どもの養育費が出るが、京都大坂では出ないという違いがあったことが読み取れる。

こうした乳母奉公や母親の病氣、死別、離別によってもたらされる乳がない状態は、捨て子の大きな理由でもあった¹⁷。他方、捨て子を貰い受ける側に目を転じると、乳がある事は、捨て子を貰う側の重要な条件の一つでもあった。しばしばあげられるのは、子を亡くして乳があるので実子として貰い受けたいという理由である。その背後には、近世社会における女と子どものいのちをめぐる状況があった。鬼頭宏によれば、近世社会にあっては、産む性であるがゆえに女性がいのちを失う率は高く、特に妊娠、出産期にあたる30歳前後では女性の死亡率は男性の二倍をしめ、また近世後半には、出生児の20パーセント未満が1歳未満で死亡したという¹⁸。捨て子の背後には、母を亡くして乳のない子と、子を亡くして乳の余っている母とがいたのである。では、近世大坂の捨て子事例からは、どのようなことが読み取れるのだろうか。

3. 近世大坂の捨て子養育とその背景

本稿で手がかりとするのは、住友家文書、小林家文書の捨て子史料である。この住友家文書、小林家文書の捨て子史料については、既に、海原亮、小堀一正による研究がある。もっとも、両者の研究は、都市大坂の社会構造や都市生活を探る手がかりとして捨て子史料を扱ったものであり、捨て子そのものに焦点をあてたものではない。海原の研究は、「捨て子という素材」を手がかりとしながら、「都市大坂の社会構造」において「確固たる地位を占めるに至った」住友家が、「都市社会の構成員として」どのような役割を果たしたのかを軸に、住友と住友が銅吹所を開設した長堀茂左衛門町（現、大阪府中央区島之内1丁目）と周辺町域との結びつきを捨て子養育に焦点をあてて考察¹⁹したものである。また小堀の研究は、主として大坂御池通5丁目、6丁目（現、大阪府北堀江三丁目・四丁目）の人別帳を初めとする多数の町方文書をおさめた小林家文書の捨て子史料を手がかりに、近世庶民の姿を、とくに「近世の経済のなかから生み出され、都市生活とともに必然的に発生した現象」である「捨子」のなかに探ろうとしたものである²⁰。

とはいえ、海原の研究は、捨て子の発見、介抱、貰い親の決定、仲介者の役割、捨て子養育をめぐる町と町人の負担をきめ細かに分析し、また小堀の研究は、捨て子の発見から養子先の決定、捨て子の死亡といった経過や捨て子経費、捨て子の養子先を丁寧に追究している点で、捨て子の実像にもせまる研究と言える。ここでは、両氏の研究成果に学びつつ、住友、小林家文書の捨て子史料を読み解いてみたい。

住友家文書には、元文3年（1738）から嘉永6年（1853）までの約115年間に53件の捨て子間係史料が含まれている。他方、小林家文書の捨て子史料は、天明2年（1782）から文久3年（1863）までの約81年間に19件ある²¹。住友、小林家文書とも、捨て子史料は、18世紀後半から19世紀前半に集中しており、本稿では、両者を重ね合わせながら分析をおこなう。その際、これらの捨て子事例のなかでも、捨て子を貰い受ける理由に、実子を亡くし、乳が沢山あることをあげている事例を取り上げる。

分析に先立ち、住友家文書、小林家文書の捨て子史料から浮かびあがる、捨て子養育のプロセスを整理しておこう。捨て子養育のプロセスは次のようなものである。町内で捨て子が発見されると、発見者は、町年寄と連名で奉行所に対し届け出、捨て子に「疵等」がないことを確認した旨が記される。その際、届を受理した町奉行所は、追って貰い人がみつければ申し出るよう指示する。養子先を探す責任は町の側にあった。次に養子先が決まると、貰い手が確かな人物かどうか、貰い手の側の町や村に貰い手の名前、印鑑の照合を行い、身元を確認したうえで、貰い人が確定する。貰い手の側は、請人をたて、町年寄と発見者に対し一礼を提出する。捨て子を貰い受けるに際しては、貰人、請人、町年寄、町年寄が不在や病気の場合は月行司、農村の場合は庄屋、庄屋が病気の場合は頭百姓が、連名で捨て子を貰いたい旨の願書を出す。奉行所の許可が得られれば、養育料や捨て子に着せる着物料などとともに捨て子が貰人に渡される。この費用は、すべ

て町の負担とされた。また貰人の側からは捨て子を大切に養育する旨の「一札」が出されている。この文言は、ほぼ定式化しており、捨て子を将来まで粗末にせず養育すること（「未々麁抹無之様養育」）町内や町年寄に対し無心をしたり、お恵みを願うようなことは一切しないこと（「無心合力ヶ間敷儀一切為申間敷候」）もし貰われた捨て子が病気、死亡の場合には、町内に届け出ることが記された。捨て子が病気、死亡の際は、捨て子をされた家は軒親として、また町は元町として死亡の確認や奉行所への届け出、埋葬まで、すべての責任を負わねばならなかった²²。

捨て子を貰う理由として実子を亡くし乳があることをあげた事例は、住友家文書では捨て子事例全体（53件）の32パーセントにあたる17件（表1）、小林家文書の場合は、事例全体（19件）の73パーセントにあたる14件（表2）となっている。これら表1、2にあげた事例31件中、28件は、生後1年未満で実子を亡くした事例であり、子どものいのちの脆さがうかがえる。また捨て子のうち12人は貰われた後に死亡している。ここからは、「家」の存続を願ったとしても生き残る子どもを予測することは難しく、また捨て子を貰ったとしても、捨て子が生き延びる可能性は、そう高くはなかったという、子どものいのちをめぐる状況が浮かびあがる。

では近世大坂の出産と乳幼児死亡をめぐる状況とはどのようなものだったのだろう。大坂三郷と言われた大坂市中は、北、南、天満組の三組からなり、御池通り5丁目、6丁目は天満組、長堀茂左衛門町は南組に属していた。この大坂三郷の特色は借家人の多さにある。大坂三郷の借家人、つまり家持ち＝町人ではない都市居住者は、元禄2年（1689）には61パーセント、天保4年（1833）には63パーセント、これに奉公人を加えれば80パーセントをしめていた²³。生類憐れみ令では、江戸の店借、地借といった借家人による捨て子の多さに注意が払われたが、大坂の場合も江戸同様、捨て子の母胎となる借家人の多さを指摘できる。

ところで大坂町方の宗門改め帳は、大坂市中、島之内の中心にある4つの町に残存しているが、その一つが、菊屋町の宗旨人別帳である。ちなみに、菊屋町は南組に属し、長堀茂左衛門町、御池通り5丁目、6丁目のちょうど中間に位置する。『大坂菊屋町宗旨人別帳』²⁴として刊行された、この菊屋町の人別帳を用いて乳幼児死亡の問題に接近しようとした研究に、速水融の「近世大坂の人口動態と乳幼児死亡 都市人口と人口史料（菊屋町）」²⁵、結婚・出産・死亡の問題を追及した研究に乾宏巳の「大坂菊屋町における結婚・出産・死亡 近世後期における」²⁶がある。ここでは大坂町方の家族や出産、乳幼児死亡をめぐる状況はどのようなものであったのか、速水、乾の研究をもとに把握しておきたい。

速水によれば、菊屋町の人別帳は人口学上の基本的属性である性と年齢に関する記載を欠くものの保存状態が良く、正徳3年（1717）から慶応2年（1866）、家持ち人については明治2年（1869）まで、ほぼ連続して残存しているうえ²⁷、イベントの月ごとの記載が詳細に書かれ、大坂という都市の人口内容がわかるという。特に、宝暦4年（1754）以降は、個人の出生、死亡、結婚、移動といった人口学上のイベントが、生じた月とともに記載され、そこからは大部分は生後

数年、長くて10年以内に他所に転出するといった都市住民の居住の不安定さが指摘できるという。また乳児死亡について速水は、満1歳時（ただし出生後1ヵ月以内の死亡を除く）の死亡率250ないし270‰前後という結果を導き出している。

他方、この人別帳から、菊屋町に50年以上にわたって定住した全部で44家の事例を抽出した乾は、それらをA期（1713〔正徳3〕年～1750〔寛延3〕年：享保期前後の38年間）、B期（1751〔宝暦元〕年～1788〔天明8〕年：宝暦・天明期の38年間）、C期（1789〔寛政元〕年～1829〔文政12〕年：寛政・化政期の41年間）、D期（1830〔天保元〕年～1870〔明治2〕年：幕末41年間）の四期にわけ、結婚・出産・死亡について分析している。

乾は、A期では結婚終了理由の多くが「夫死」であったのに対し、B期以降は「不縁」や「妻死」が増加するという変化に、「初婚年齢の低下とあいまって、『イエ』中心主義」との関連をみる。結婚年齢は、B、C期に大幅に低下するが、まず家持人層に若年化があらわれ、C期には借家人層におよぶ。また出産なしの夫婦や、子供の死亡率の高さから相続人が得られない場合の養子縁組の増加も「家」意識の成立を裏付けるものと乾は指摘している。

出産については、A期の平均出産人数が2.37人であったのに対し、B期には1.60人と極端に低下し、出産についてもA期とB期との相違が指摘できるという。この出産児数の減少には、B期以降の結婚期間の短かさや不縁の増加が関係しており、子どもができず不縁となる事例では、5年未満で夫婦関係が解消された事例の66パーセント（13件）は出産なし夫婦であり、その結婚期間は、2年未満と短い。またこの出産なし夫婦13件の69パーセント（9件）は家持人層であり、家持人のほうが「家」存続を重視していたのではないかという。以上のような結果から乾は、大坂町人社会における「家」の家意識の成立を18世紀半ばにみている。

では、子どもと女のいのちをめぐっては、どのようなことが読み取れるのだろうか。四期全体の平均出産児数は2.02人であり、近世都市における出産児数の低さがみてとれる。では死亡はというと、生存期間の判明する者のうち、出生後2年未満での死亡は166人中50人と全体の30.1パーセント、これに5年未満での死亡をあわせると全体の53.6パーセントをしめ、満2歳までに3割、5歳までに半数以上が死亡する（表3）という、都市大坂における子どもの生存の厳しさが浮かびあがる。

妻については、表4に示すように、結婚後10年未満で死亡する者が全体の25.3パーセントをしめ、しかも結婚後10年未満の妻の死亡数は夫の倍以上となっている。乾は、この結果について「この期間が出生率のもっとも高い時期ということからみると、出産に関連した死亡があったことを示して」と述べている。

表3 生存期間の判明する死亡者数

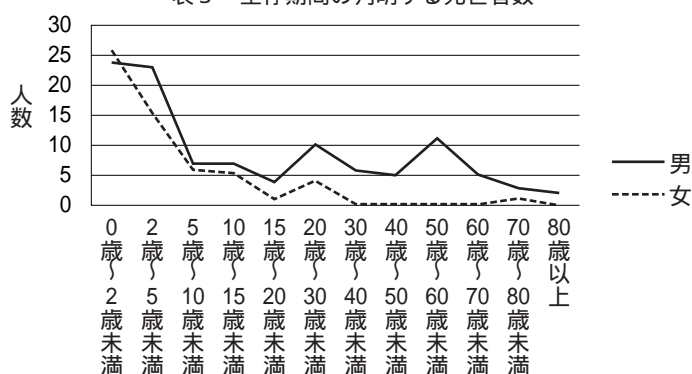
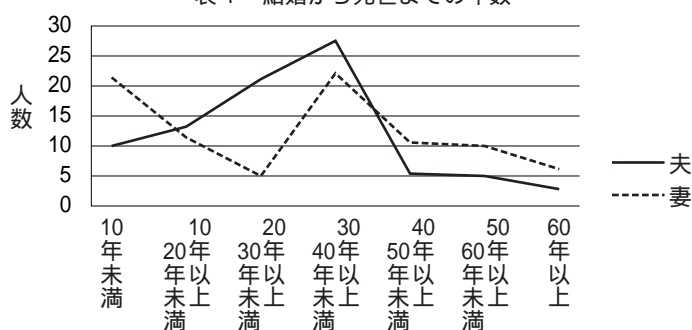


表4 結婚から死亡までの年数



出典：表3、4は乾宏巳「大坂菊屋町における結婚・出産・死亡 近世後期における」『大坂教育大学紀要 第 部門』第39巻第1号より作成

2歳までに子どものいのちの3割が、そして女のいのちも出産によって失われることが多いというこれらの結果は、大坂市中における子どもと女のいのちの厳しさを物語る。捨て子養育の背後には、こうした女と子どものいのちをめぐる状況があったことに注意をしておきたい。

さらに菊屋町宗旨人別帳の個別事例からは、捨て子と乳をめぐる興味深い事実も見えてくる。このなかに、一つだけ、明和6年（1769）の「明和六年巳丑年 十月宗旨人別帳」に、捨て子を貰い受けた事例が登場する²⁸。そこには、大和屋弥兵衛という人物が捨て子を貰い受けたことが記されている。大和屋弥兵衛の家族は、女房しも、娘きくの三人家族。また「私支配之借家大和屋弥兵衛儀此度御前町丹波屋平兵衛家守丹波屋仁兵衛支配之借家江宅替仕候、已上」とある。ここからは大和屋弥兵衛は借家人であり、転居をしていることが見て取れる。さらに、「銚屋町鈴鹿屋甚兵衛軒下二捨有之当才之男子、私養子二貰請度奉存候二付、右丁内申合六日奉願上候処、順之通被下置候、養子丑之助 寅三月廿日 大和屋弥兵衛」という張り紙があり、菊屋町に近い銚屋町（現、心斎橋1～2丁目）の鈴鹿屋甚兵衛の軒下に捨てられていた当歳の男の捨て子を庚

寅3月20日（明和7年）に養子に貰いうけ、丑之助と名づけたことがわかる。では、実の娘のきくは、捨て子を貰い受けたとき、何歳だったのか、そして捨て子の丑之助はその後、どのように成長したのだろうか。残念なことに、その前後の宗旨人別帳を調べてみても、得られる手がかりはごく僅かである。大和屋弥兵衛の家族三人の名前が登場するのは明和3年（1766）の宗旨人別帳からであるが、きくが何歳かは不明である。またこの家族は、明和7年（1770）の宗旨人別帳からは既に消えており、養子として貰い請けた丑之助の運命も不明である。しかしこの事例は、転居を繰り返すような不安定な身分の借家人が、捨て子を貰い受けたことを示す点で興味深い。

もう一つ、菊屋町宗旨人別帳で目を引くのは、乳持ち奉公人の多さである。乾は、「出生にとまって乳母を雇用する場合がみられ」、これを出生児と推定したと述べている。宗旨人別帳からは、乳母が頻繁に雇われ、かつ暇を出されたことがみえてくる。一例をあげておこう。明和1年（1764）和泉屋吉兵衛の事例²⁹である。菊屋町の宗旨人別改め帳には職業と年齢記載がないが、菊屋町文書から乾が抽出した菊屋町住民の職業によれば、吉兵衛は町人で安永9年（1780）には神事芝居貸物商売をしていたようだ³⁰。その家族は、女房浅、子植松、娘まつの四大家族。その他に、下人喜兵衛、源七、下女すや、乳母まき、同つやがいる。この明和1年の宗旨人別帳には、「閏十二月女房浅病死」と「亀三郎出生」が並んで記載され、さらに「閏十二月、乳母くの抱ル」とあることから、浅の病死が亀三郎を出産したことによるものであり、そのため乳母くのが雇われたことがうかがえる。

また、乳母についてみると、「三月まき暇遣ス」「三月乳母くに抱ル」「乳母くに五月十二日」、「五月乳母その抱ル」「九月乳母くれ暇遣ス」「九月さき抱ル」といった具合に、頻繁に乳母を雇い、また暇を出していることがみてとれる。このように乳母を頻繁に雇いまた暇を出すといった事例は菊屋町宗旨人別帳には数多くみられる。また、女房が病死した場合、吉兵衛のように乳母を雇う形ではなく、すぐに再婚する事例も散見できる。たとえば、安永4年（1775）の人別帳に記載された布屋吉兵衛、女房みよ、子吉五郎の家族の場合は、女房みよが「申正月二病死」してほどなく「申三月」に「下女さつ」を雇い、さらに「申四月」に女房わきを「久之助町壺丁目河内屋弥兵衛借家大和屋平兵衛方へ呼迎ル」とある³¹。これら和泉屋、布屋、二人の吉兵衛の事例からは、母親が出産で死ぬことも多かった近世にあって、「家」を維持・存続させ、また子どものいのちを保障するために、乳母を雇う、再婚するといった様々な努力が払われた様相がみてとれる。捨て子養育の背景には、こうした「家」と女、子どものいのちをめぐる状況があり、また子どものいのちを保障するものとして乳は重要な位置を占めていた。

4. 捨てる親、貰う親

捨て子をしたのは、どのような人々だったのか、そのことがわかる事例をまず取り上げてみよう。一つは、宝暦10年（1760）10月3日の事例である。近世大坂の捨て子事例の特徴は、岡山や

津山藩には多く見られた捨て子の作法ともいえるような、捨て子に書付、お守り、へその緒、初髪など様々なモノを添えて捨てた事例がみられない点にある³²。もっともそれは、書類作成上の問題なのか、実際に、そうしたモノが添えられていなかったのかは不明である。そのなかで一件だけ、住友家文書の捨て子事例の中に、手紙が添えられた事例がある³³。

この捨て子は、守袋のなかに産髪と臍の緒、そして生まれた日、書付を入れて捨てられていた。その書付には次のように記されている。

口上

一御家を見かけ、此しけト申当年二才罷成候者すて申候、此娘壱人にて我等出世之さまたけト相成りなんき仕候、母二はなれそれゝ色々と致シ、是迄者そたて申候得共、もはやよふいく得不仕せひなく御家へ御無心申上候、あわれふびんと思召シ、宜敷御取上被遊被下候ハ、人間壱人御すくい、そのミならず、私シも何かたへ成共主人ミ取、二度かめいお引おこし申度奉存候間と角此者御座候ゆへ、左様之義も相成り不申、又外々遣シ申度候得共、おは打かひし候ろう人もの二御座候得は、其義相成かたく如此仕合御座候

今月今日

ここにはしげという名の数え年で二歳になる女の子を捨てる理由が記されている。手紙の日付は「今月今日」とあり、前もって書かれたものだろう。書付には、この娘がいては自分が生きていく妨げとなること、母親に離れて以来、これまでは何とか育ててきたが、もはや養育できないので、あわれ不憫と思って捨ててくだされば人間を一人救うことになる、それだけではなく、自分もどこかへ奉公し、もう一度家をおこしたいが、この娘がいては、それもままならず、里子など外に遣したいけれども「おは打かひし」（筆者注：尾羽うち枯らし、おちぶれてみすばらしい姿になるの意）浪人ものなので、それもできないとある。母と離れてというのは死別か離別かは不明だが、乳がない状況をもたらすものだったのだろう。「色々と致シ」との文面からは、その後の苦労がうかがえる。また「我等出世之さまたけ」というのは、娘がいるから働けないという意味なのか娘がいては再婚できないという意味なのか不明だが、子どもを捨てる大きな理由が「二度かめいお引おこし申度」、つまりもう一度家名を起こしたいことに求められている点に注目したい。ここからは、家の維持・存続のためという理由が捨て子の正当な理由として認められていた状況がうかがえる。

もう一つは、天保3年（1832）9月20日の暮六つ時、住友吉次郎の居宅軒先に常珍町（現、大阪市南区千年町）山田屋国三郎の借家に住む河内屋源七、女房きよが、2月に産まれた生後7ヵ月になる女の子を捨てた事例である³⁴。この事例の場合は、捨て子発見の翌日の9月21日に実の両親が名乗り出、実親に間違いがないことがわかったため捨て子を返し、捨て子の経緯を源七が申

し述べた口上書が実親の住む常珍町から出されている。口上書によれば、源七は「指物職渡世」であったが、5月頃夫婦とも病気になる、きよの乳が出なくなってしまった。そのため、「難渋困難」に陥り、夫婦で相談の上、捨てたという。しかしなんと不憫なので、翌朝、子どもを返してくれるよう、長堀茂佐衛門町へ行き頼んだが、すでに町奉行所に届け出を済ませていたため処罰を受けたのであった。源七の女房は町預けとなり、源七は「所払」という厳しい処分を受けている。しかし、町からは、源七は「難渋者」であるというので「合力」として銭2貫文が町内入用として計上されている。

海原は、この事例について「事態が露見すると、実親は厳しい処分を受けなければならない。重罪と知りつつやむを得ぬ事情で子捨てを実行する以上、その事情を斟酌し、町の側としても柔軟な対応を心がけたのではないかと述べている³⁵。源七、きよが赤子を捨てた直接の理由は、きよの乳が出なくなってしまったことにあった。借家住まいの都市下層民にとって乳が出ないことは、直接的な育児困難をもたらすものであったのだろう。と同時に、町の側は、難渋ゆえの捨て子には許容的であったこともうかがえる。

次に、捨て子を貰い受けた事例を取り上げ、人々が捨て子を貰い受けた動機はどこにあるのか、捨て子養育の背景について探してみたい。

一つは、文化4年(1807)9月8日暁6時半頃(午前6時半頃)住友家の土蔵ひさしの軒下に、当歳の女の子が捨てられていた事例(表1-事例番号6)である。この場合は、捨て子発見後の9月15日に、摂州河辺郡浜村(現、大阪市鶴見区)の百姓市右衛門が、同じ村の百姓七右衛門を請人にたて、捨て子を貰い受けたいと申し出ている。市右衛門は、請人七右衛門、庄屋理左衛門と連名で「先月十五日出生之女子有之候処同十九日相果、乳も沢山二有之候二付、右捨子養子娘二貫請度奉存候、尤外二八歳之男子、五歳之男子、右兩人御座候得共、末々二而者右兩人之内忒与見合度」と「掛合」い、奉行所に認められている。市右衛門は、捨て子を「養子娘」に貰い受ける理由として、8月15日に生まれた女の赤子が、生後4日の19日に死に、乳も沢山あること、また将来は、この家の、8歳と5歳の倅のうちのどちらかと夫婦にしたいことをあげている。

この捨て子には、養育料として銀250目、着物料として金子2歩が添えられ、もし、捨て子を差し戻すようなことがあれば、「養育料并二着物料共相添差戻」すよう、また、市右衛門が「身上不如意」になったとしても、「御丁内并二吉次郎殿」に「無心合力ケ間敷儀」は一切言わないよう、そして捨て子が病気になったり、病死した場合は、町内に届け出るよう言い渡されている。

二つ目の事例は、文政7年(1824)12月17日夜5つ時(午後8時頃)住友家の東堀通りの土蔵入り口前に当歳くらいにみえる女の捨て子があった事例(表1-14)である、この場合は、捨て子発見の9日後の12月25日に、河州松田郡諸口村(現、大阪市鶴見区)の百姓与次兵衛を請人にたて、同村百姓作兵衛へ養子娘に貰い受けたい願いが出されている。作兵衛と女房ぎんには、

文政6年（1823）2月に女の子が生まれたが、およそ生後10ヵ月の12月12日に死に、ぎんには乳が沢山あること、また夫婦には、他に8歳になる小作次郎という実子があり、将来は倅と「妻合」せたいので、大切に養育するというのが、捨て子貰い受けの理由である。

この事例では、26日に養育料として銀200目、衣類料として銭1貫文が与えられているが、その他に、この捨て子にかかった費用（「入用」）をみると、「口入口銭銀」として銀40目が明石屋喜兵衛と油屋喜兵衛に、また12月17日夜から26日までの9日間の「捨子預け賃」として銭1貫800文、「四百文 蒲団二ツ」「五百文 綿入貳つ、襦袢袴」が藤七に支払われている。この入用の記述からは、貰い手がみつかるまで捨て子を預かる人物がいたこと、また捨て子の貰い人探しには口入屋が介在していたことがみえてくる。海原によれば明石屋喜兵衛は、文政期以降、しばしば登場する人物で肩書きに「口入」と明記された事例もあることから、貰い親と町の間には立っていた人物、また「部屋頭男」「下男藤七」「部屋頭藤七」など様々な呼称で登場する藤七は、住友の手代ではないかという³⁶。

三つめの事例は、天保4年（1833）7月20日暮6つ時（午後6時頃）住友家居宅土蔵の前に、当歳とみえる女子が捨てられていた事例である。この事例は、実子を亡くした事例ではなく、乳についての記載もないため表にはあげていない。この捨て子については、その約1ヵ月後の8月21日、河州丹北郡河辺村（現、大阪市平野区）百姓武助から同村の五兵衛を請人にたて「養女」に貰う願いが出されている。武助と女房の間には、息子が二人いるが、捨て子が「成人後」、二人の息子のうちどちらかと「妻合」せ、「相続」させたいというのである。この捨て子の「捨子入用」からは、「口入銀」が平野屋久右衛門に、「丹北郡川辺村へ聞合二罷越」た長堀茂左衛門町の下役庄兵衛へ銀2両が、「捨子始終世話致候」「鱈谷町内下役嘉七」には金2朱が、また捨て子を7月20日から8月23日まで世話した藤七には「日数〳三十四日分昼夜、貳百文ツゝ」の計算で銭6貫800文、むつきに用いた「古きれ代」として銭300文、捨て子の「丸薬価代」として銭172文が支払われている。この事例は、乳がないにも関わらず、「家」の相続という理由によって捨て子貰い受けの願いが認められた事例である。

また、捨て子がすでに乳を必要としない年齢になっている場合は、乳がなくても貰い手となることを認められている。住友家文書のなかにはもう一例、女房に乳がないが実子がいないので男子を貰った事例が記録されている³⁷。この場合は、捨て子がすでに三歳になっているので「食事」で養育できるからとあり、数え年で、三歳くらいが離乳の時期であったことがうかがえる。

このように、捨て子を貰い受ける理由には、実子を亡くして乳が沢山あることのみならず、実子と夫婦にし相続させたい（「妻合相続」）また「家名相続」させたいといった「家」の維持・存続への願いがあげられている。しかし、死去した実子と貰い受けた捨て子の性別は必ずしも一致しているわけではない。嘉永5年（1852）12月1日暁6つ時過ぎ頃、吹屋南蛮蔵の前に当歳とみえる女の捨て子があった。この捨て子はその11日後の12月12日、河州丹北郡矢田部村（現、大

阪市住吉区)の百姓作右衛門を請人に、庄屋が病気のため頭百姓の治兵衛と連名で、同村の百姓治右衛門の「養女」に貰受けた願いが出されている。願いには、治右衛門と女房のとの間には当歳になる男子がいたが、11月15日に死に、乳が沢山あるので、この乳で養育し「成人之後家名相続為致候」と記されている。

この捨て子の場合も介在したのは明石屋喜兵衛であり、12月13日に、口入料として銀20目を受け取っている。捨て子に添えられた養育料は銀220目である。また、12月1日から13日までの「預ケ賃一日百五拾文ツゝ」で1貫950文が藤七に、「捨子貰先聞合二町内罷越候節、支度代会所渡し」として金2歩が入用として上げられている。捨て子の貰い先については、町から聞合に行く、捨て子を貰い受ける際には、庄屋、請人が関与するなど、捨て子養育には町や村の共同体も関与していた。しかし、このように様々なプロセスを経て捨て子を貰い受けたとしても、捨て子のいのちが確かなものだったわけではない。この捨て子の場合、嘉永6年(1853)5月23日に病死したとの届が町に届いたため、町から一人が出向き見届けた上で番所に届け出るとともに、「香料」として金2朱を出している。捨て子は貰われて半年もたたないうちに死去し、町は捨て子の死まで、その責任を持ったのである。

この事例に限らず、捨て子たちのその後の運命は厳しいものであった。捨て子たちの多くは、疱瘡、驚風、腫れ物、虫病、胎毒など、近世社会にあって、生後1年未満の子どもたちのいのちが奪われる原因となった病気で亡くなっている。また、その死に至る経過を記した史料のなかにはしばしば、「乳をつきかえず」「乳汁引不申」など、乳を飲もうとしないという記述がみられ、生きようとする力のない子どもの、あらがえない死として受け止める人々の心性がうかがえる。

ところで、百姓治右衛門とてふの夫婦の場合、なくした実子は男子だが、家名相続のために貰い受けたのは女の捨て子である。では、亡くした実子と捨て子の性別との間には、どのような関係が見られるのだろうか。住友家文書、小林家文書の実子と捨て子の性別割合を表5、6に示した。そこからは実子と捨て子の性別にはズレがあることが見て取れる。住友家文書の場合は、実子より捨て子に男が多く、小林家文書の場合は、実子より捨て子に女が多い。

表5 住友家文書にみる実子と捨て子の性別割合

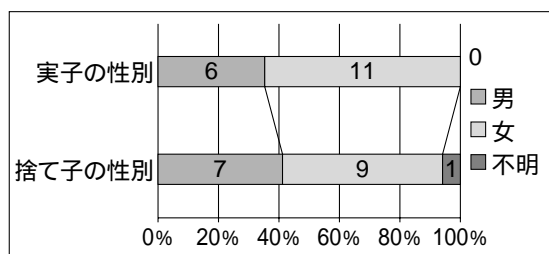
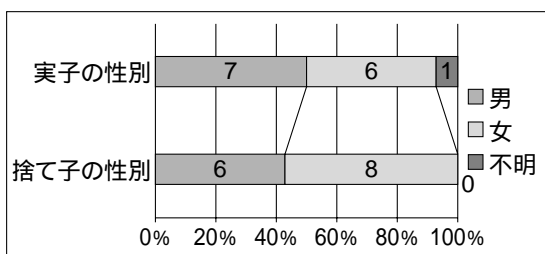


表6 小林家文書にみる実子と捨て子の性別割合



しかしそのズレが何によるものか、この表だけではわからない。これら貰い人の中で、百姓

と明記された事例は、住友家文書では17件中14件、小林家文書では14件中7件の合計21件である。この百姓たちが貰い受けた捨て子の性別は、男が8人（38パーセント）、女が13人（65パーセント）、他方、大工、八百屋、扇子屋など百姓以外の身分の者の場合は、男が3人（33パーセント）、女が6人（66パーセント）と、わずかに百姓のほうで男子の比率が高いものの、有意な差はみられない。とりあえず、ここでは、亡くした実子と捨て子の性別が必ずしも一致しているわけではないことを指摘するに留めておく。

では、捨て子たちは、どこに貰われていったのだろうか。海原は、捨て子の貰い手について、宝暦10年（1760）頃までは大坂市中、しかもその大半が住友本店近隣の島の内であったのに対し、天明期（1781）以降は、大坂近郊の農村へ、しかも本店から距離的に近い東成郡から時代が下るにつれて山本新田、丹北郡、若江郡、茨田郡などやや遠い農村へと、その場所が変わっていったと指摘している³⁸。図4、表7は、表1、2にあげた捨て子が貰われた地域を示したものである。確かに年代による地域的变化をみると、小林家文書の捨て子事例についても、近隣から遠方の農村部へという変化を見て取れる。そこには口入屋の存在と、農村部からの捨て子への需要があった。

小林家文書には口入屋が登場する事例が三例ある（表8）が、そこからは、子どもを亡くした夫婦が、自分たちの希望を口入れ屋に申し込んでいたことがわかる。いずれの事例でも、一人の捨て子について複数の夫婦が申し込み、そのなかの一組の夫婦が捨て子を貰い受けている。では、何が貰い親を決定する際の決め手となったのだろうか。

弘化4年（1847）6月28日、奈良屋忠兵衛の居宅軒先に捨てられた当歳の男の捨て子（事例1、表2 - 5）には、6組の夫婦が申し出ている。そのなかで貰い人となったのは河州若江郡中小坂村（現、東大阪市）の百姓佐吉（45歳）、女房そら（40歳）の夫婦である。この夫婦には、弘化3年10月21日に出生した子どもが一人いたが、弘化4年7月7日、生後8ヵ月で病死し、乳が沢山あるので、捨て子を貰いたいと申し出ている。この夫婦には、他に10歳の女子が一人いるが男子はいない。しかも捨て子を貰いたいと申し出た6組の夫婦のなかで、佐吉は45歳、そらは40歳と、もっとも年齢が高い。次に弘化5年（1848）2月晦日、日向屋藤九郎借家路地に捨てられた2歳の男の子の場合（事例2、表2 - 6）には、京町堀4丁目の「けたや」が口入屋となり、4組の夫婦のうち、池田屋徳兵衛と女房もとの夫婦が貰い人となっている。しかし残念ながら、この夫婦の年齢はわからない。

嘉永4年（1851）2月20日、河内屋重右衛門居宅軒先の当歳の男の捨て子の場合（事例3、表2 - 7）は、三組の夫婦が捨て子を貰い受けたいと申し出ているが、貰い受けたのは、摂州川辺郡塚口村（現、尼崎市）の百姓清兵衛（46歳）女房もと（42歳）の夫婦である。この夫婦は、嘉永3年（1850）5月に実子をもうけたが、12月下旬、生後4ヵ月で病死し、それから2ヵ月たつものの「乳汁今二沢山二御座候」というので貰い人となっている。この夫婦もまた、三組の夫婦

のなかでもっとも年長の夫婦であった。とすると、貰い親を決定する際の決め手となったのは、夫婦の年齢、とくに妻の年齢の高さだったのではないか。事例1、3とも、妻は40歳を超え、実子をもうけることは難しい年齢となっている。捨て子は、これから実子が生まれることが期待できない夫婦に託されたと考えられる。夫婦の年齢に注目する理由はそれだけではない。口入屋が介在していない事例では、夫婦の年齢が記載されることはない。そのこともまた、口入屋が介在し、貰い手希望者が複数いた場合の決め手となったのは夫婦の年齢であったことを物語る。

これら口入屋が介在した事例で興味深いのは、事例2にみるように「男子入用」と捨て子の性別を指定している点である。捨て子の貰い手として名前があがっている四組の夫婦のうち三組は実子を亡くした夫婦だが、いずれも「男子入用」と性別を指定している。しかも百姓庄蔵(33歳)女房むめ(27歳)の夫婦が亡くしたのは「娘」だが、「男子入用」としている。この実子を亡くした三組の夫婦は、いずれも摂州川辺郡清水村、塚口村、額田村と「神埼渡」³⁹の周辺の村々に住む。この場合養子先を探している町は、口入屋から、額田村の周助のもとに行けば三組の夫婦のもとへ案内するという書状を受け取っている。

では、「男子入用」の文面は、「家」の存続のためにも、また労働力としても男子が求められたことを示すのだろうか。他方、先に見たように、女の捨て子については、将来、息子と夫婦にしたいとあるところからすると、労働力としてのみならず、その生殖能力が期待されたのだろうか。興味深いのは、捨て子貰い受けの理由として「家」の維持・存続を上げているのは、いずれも百姓だという点である。菅原は都市下層民相互の「家」の維持・存続を保証するものとして捨子養子制度があったのではないかという仮説を提示した。しかし、近世大坂の捨て子事例からは、そのみならず、都市下層民と農民相互の関係のなかに、農民の「家」の維持・存続への願いを保障するものとして捨て子が、また両者を媒介するものとして口入屋が存在していたことが見えてくる。

おわりに

これまで近世大坂の捨て子養育について、捨て子発見から貰い人確定、捨て子の死までの過程で作成された史料群を手がかりに、捨て子の命綱とも言える乳に焦点をあて、捨てる側と貰う側、捨て子と「家」の維持・存続の関係、捨て子養育に関わる人々、その背後にある「家」と乳幼児や女のいのちをめぐる状況など、捨て子のいのちをめぐる様々な関係性に留意しつつ考察をすすめてきた。

そのなかで明らかになったことは四点ある。一つには、都市下層民の具体的な育児困難の一つに乳がない状況があり、他方、貰う側の大事な条件は乳があることといった具合に、乳は捨て子のいのちと養育の要であったこと、二つには、捨てる側、貰う側ともに、その理由として「家」の維持・存続をあげており、少なくとも「家」の維持・存続のために捨てる、貰うことは近世大

坂にあっては正当な理由として認められていたらしいこと、三つには、その背後には、当時の高い乳幼児死亡率があり、たとえ「家」の維持・存続を願ったとしても、生き延びる子どもの数を予測することは困難な子どものいのちをめぐる状況があったこと、四つには、そうした状況のなかで、都市の捨て子と「家」の維持・存続を願う農民たちを結ぶものとして口入屋が存在し、その際、複数の貰い手候補から選ばれたのは、年齢が高く、実子を儲けることが難しい夫婦だったらしいことの四点である。

従来、近世都市の人口再生産構造については、「都市蟻地獄説（都市墓場説）」と呼ばれる仮説が定着し、農村に比べて高い死亡率・低い出生率を特色とする都市では、労働人口を確保するために、広範囲からの恒常的な人口流入を必要としたとされてきた。しかし、近年の歴史人口学では、近世後期の京都、大阪、主要城下町における人口減少と中小在郷町の人口増加など、人口再生産構造と人口移動の側面から、都市・村落関係を再検討するといった課題が提起されている⁴⁰。捨て子養育の問題についても同様に、都市内部の町相互の関係だけでなく、都市と農村の関係を視野に入れる必要がある。その課題が明らかになったことが、ここでの発見の一つである。

とはいえ、本稿で取り上げたのは捨て子事例のなかの一部分であり、捨て子と共同体の関係、大坂の捨て子禁令や捨て子養育制度と事例の関係、捨て子入用の分析、貰われなかった捨て子も含めた捨て子のいのちの序列化化についての考察など、残された課題は多い。その意味で本稿に示したものは、捨て子のいのちをめぐる関係史への一つの模索の試みである。

註

- 1 沢山美果子『江戸の捨て子たち その肖像』吉川弘文館、2008年
- 2 沢山美果子「子育てにおける男と女」『日本女性生活史4近代』東大出版会、1990年、140頁
- 3 大藤修『近世農民と家・村・国家 生活史・社会史の視座から』吉川弘文館、1996年、113頁
- 4 大藤修『近世村人のライフサイクル』山川出版社、2003年、34頁
- 5 倉地克直『全集 日本の歴史 第11巻 徳川社会のゆらぎ』小学館、2008年
- 6 菅原憲二「近世京都の町と捨子」『歴史評論』第422号、1985年
- 7 沢山美果子「近世後期の『家』と女の身体・子どもの『いのち』 『いのちのジェンダー史』のために」『七隈史学』12号、2010年
- 8 鬼頭宏「近代日本の授乳と出生力」『上智経済論集』40(2)、19 - 28頁、1995年
- 9 氏家幹人『江戸の病』講談社叢書メチエ、2009年
- 10 北山修編『共視論 母子像の心理学』講談社選書メチエ、2005年所収の浮世絵母子像を分析した北山修の「共視母子像からの問いかけ」、或いはアジア、日本の親子画を分析した中村俊哉の「アジアの親子画、日本の浮世絵 育児文化の変容」を参照のこと
- 11 江戸子ども文化研究会編『浮世絵のなかの子どもたち』くもん出版、1993年、16頁
- 12 前掲2、140頁
- 13 一関市博物館『民間備考録 江戸時代の飢饉と救荒書』2002年所収
- 14 塚本学『生類をめぐる政治』平凡社、1983年、224 - 225頁

- 15 井原西鶴『世間胸算用』「三 小判は寐姿^{ねすがた ゆめ}の夢」、麻生磯次、富士照雄『世間胸算用 決定版 対訳西鶴全集 13』1975年、明治書院、84頁
- 16 喜多川守貞著、宇佐美英機校訂『守貞謾稿』一、1996年、岩波文庫、158 - 159頁
- 17 沢山美果子、前掲 1、112 - 113頁
- 18 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』、講談社学術文庫、2001年、144頁、182頁
- 19 海原亮「都市大坂の捨て子養育仕法 『年々諸用留』の事例から」『住友史料館報』第40号、2009年、89 - 91頁
- 20 小堀一正「町人文化の光と影 捨て子のゆくえ」『近世大坂と知識人社会』清文堂、1996年
- 21 小林家文書は、大阪市立中央図書館所蔵
- 22 海原、前掲論文、104 - 109頁、小堀、前掲書、242 - 246頁
- 23 小堀、前掲書、215頁
- 24 坂本平一郎・宮本又次編『大坂菊屋町宗旨人別帳』（全七巻）吉川弘文館、1971 - 1977年
- 25 速水融「近世大坂の人口動態と乳幼児死亡 都市人口と人口史料（菊屋町）」『歴史人口学研究 新しい近世日本像』藤原書店、2009年所収
- 26 乾宏巳「大坂菊屋町における結婚・出産・死亡 近世後期における」『大坂教育大学紀要 第 部門』第39巻第1号、1990年
- 27 菊屋町の宗旨人別改帳は、正徳3年（1713）～慶応2年（1866）まで、家持人については明治2年（1869）までほぼ連続して残存（欠年は正徳5年（1715） 享保2年（1717） 享保9年（1714） 享保10年（1725） 寛延元年（1748） 宝暦13年（1756） 明和5年（1768） 安永5年（1776） 天明5年（1785） 寛政元年（1789） 弘化3年（1846） 文久元年（1861） 慶応3年（1867）と156年間のうち17年分）している
- 28 『大坂菊屋町宗旨人別帳』第2巻、吉川弘文館、1972年、299 - 300頁
- 29 『大坂菊屋町宗旨人別帳』第2巻、吉川弘文館、1972年、203 - 204頁。なお、この事例は、速水、前掲25、281頁にも「調査が毎月行われた」「この宗門改め帳が持つ情報の精密さ」を示す「記載事例」として掲載されている。
- 30 乾宏巳『なにわ 大坂菊屋町』柳原書店、1977年、291頁、出典は『菊屋町文書』75
- 31 『大坂菊屋町宗旨人別帳』第3巻、吉川弘文館、1973年、110頁
- 32 沢山美果子、前掲 1、57 - 59頁、なお、小松裕は、『全集 日本の歴史14『いのち』と帝国日本』（小学館、2009年）のコラム「捨て子の作法」で、出生年月日や氏神、捨て子にいたった事情を記した書付を添える捨て子の作法は、福岡などの地方では1910年代まで続いたと指摘している。
- 33 『住友史料叢書 年々諸用留 七番』117、思文閣出版、2001年、272 - 273頁
- 34 『年々諸用留 十三番』未公刊
- 35 海原、前掲論文、123頁
- 36 海原、前掲論文、135 - 136頁
- 37 『住友史料叢書 年々諸用留 九番』116、思文閣出版、2007年、246 - 251頁、寛政5年5月28日、東成郡北平野町7丁目の百姓吉兵衛借家で子どものない京元屋弁吉が貰い上げた事例
- 38 海原、前掲論文、127 - 128頁
- 39 神埼渡は中世から近世に見える渡し名で、三国川（現、神崎川）と猪名川の合流点に位置し、西岸の神埼（現、尼崎市）と東岸の加島（現、大阪市淀川区）を結んでいた。
- 40 川口洋「日本人口学会第63回大会企画セッション1：都市・村落関係の歴史人口学趣旨」<http://www.paj.org/>（2010年12月15日閲覧）

付記

本稿作成にあたっては住友史料館研究員の海原亮氏、大阪市史料調査会調査員の松岡裕之氏に大変お世話になった。また本稿作成の過程で、2010年度立命館大学大学院先端総合学術研究科公募研究会「出生をめぐる研究会」、福岡大学大学院人文科学研究科（史学専攻）集中講義、民族学博物館共同研究「ウエルビーイングの思想とライフデザイン研究会」（代表：鈴木七美）で報告する機会を頂き、福岡大学大学院の院生の皆さん、コメントをしてくださった立命館大学の松原洋子氏、吉田一史美氏、大坂府立大学の田間泰子氏、そして鈴木七美氏はじめ研究会参加者の皆さんから貴重なご意見を頂いた。さらに捨て子史料の読み本作成については内池昭子氏、地図、図表作成については岡山大学大学院の景山佐保子氏、陶澤真理子氏に助けて頂いた。記して感謝申し上げたい。

なお本稿は、平成22年度～平成24年度科学研究費補助金基盤研究（C）の研究成果の一部である。

表1 住友家文書の捨て子記事中、実子を亡くして捨て子を貰い受けた事例（住友家文書『年々諸用留』より）

通番	年 月 日	発見場所	捨て子の性別（実子と性別が異なる場合*）	捨て子の年齢	貰い人	貰い人の養育理由	実子の性別	実子の死亡年齢	備考（捨て子死亡など）	出典（既刊分は記事番号記載）
1	1771(明和8 年 8月4日 夜五ツ半頃	居宅裏組筋軒下	男	当歳	大工善右衛門借家河内屋市兵衛(摂州東成郡天王寺村西堀越町)	去寅12月出生の男子、4月病死、乳沢山あり、6歳になる女子1人、男子はなし	男	生後4ヵ月	乳持の方へ8月5日から19日まで預けた入用53匁8分5厘	『年々諸用留八番』46
2	1790(寛政2 年 4月	支配借家の軒下	女*	不明	油屋利兵衛借屋今津屋久兵衛(南綿町)	女房出産の上倅死亡、乳沢山あり	男	出産後すぐか?		『同九番』68
3	1793(寛政5 年 10月14日 暁六ツ時過	居客家屋敷裏尻軒下	男	当歳	伊勢屋次郎吉借家八百屋京藏(南瓦町)	9月24日出生の男子、25日に死亡、乳沢山あり、他に倅なし	男	生後1日		『同九番』129 131
4	1797(寛政9 年 9月29日 夜八ツ時頃	居宅前(西横町)軒下溝際	男	生後50日位	百姓九平衛(摂州東成郡猪飼野村)	5月3日出生の男子、9月23日死亡、乳沢山あり、他に5歳になる女子あり、倅なし	男	生後4ヵ月		十番
5	1805(文化2 年 9月27日 夜八ツ時過	東横町土蔵ひさしの下	女	生後100日ばかり	百姓利平衛(摂州西成郡山口村)	8月出生の女子が死に乳沢山あり	女	生後1ヵ月	発見後、「乳有之方」へ預け、捨て子にふくと名付、10月12日から痲痘、24日暁六ツ時頃死去	十番
6	1807(文化4 年 9月8日 暁六ツ半時頃	居宅表並びひさし軒下	女	当歳	百姓市右衛門(摂州河辺郡浜村)	8月15日出生の女子、19日に死に乳沢山あり、8歳、5歳の男子あり、8歳男子と見合す	女	生後4日		十一番
7	1807(文化4 年 12月14日 朝六ツ半時過	居宅軒下ひさしの内	不明	当歳	百姓弥八(摂州東成郡木野村)	11月5日出生の女子、17日に死去、乳沢山あり、4歳の女子1人あり、倅なし	女	生後12日		十一番
8	1807(文化6 年 7月4日 朝六ツ時頃	浜納屋地土蔵入口	女	2歳	瓦屋喜平衛借家百姓長七(摂州東成郡天王寺村梶川町)	正月出生の女子、6月中旬死去、乳沢山あり、男子1人あり、この者は家を継がないので捨て子を養子に	女	生後6ヵ月		十一番
9	1807(文化6 年 11月13日 朝六ツ時頃	居宅軒下ひさしの内	女	当歳	百姓源右衛門(摂州東成郡今里村)	他に4歳になる男子1人	女	生後1ヵ月未満		十一番
10	1816(文化13 年 11月19日 暮半頃	本宅入口東手	男*	当歳	百姓又右衛門(摂州東成郡大今里村)	女房伊予、11月2日に出産、7日に死去、乳沢山あり、9歳、5歳の女子あり、倅なし	女	生後5日	捨て子には初名政吉との書付あり	十一番
11	1817(文化14 年 3月12日	居宅軒下ひさしの内	女(死亡)	当歳	百姓久佐衛門(岸本茂十郎代官所河州若江郡川俣村)	女房やす、2月出産の女子死去、乳沢山あり、3歳の女子あり、倅なし	女	生後1日	左の耳上に胎毒と見え、少々はれのある捨て子、6月16日胎毒で死亡	十二番
12	1818(文化15 年 2月14日	居宅軒下朝六ツ半頃	男*	当歳(2月出生)	百姓孫兵衛(大久保加賀守様御領分河州若江郡山本新田)	女房いし、昨年11月に女子出産、12月に死去し、乳沢山あり	女	生後1ヵ月		十二番
13	1819(文政2 年 6月27日 朝六ツ過	居宅表軒下	男	当歳	百姓朝右衛門(久世長門守様領分泉州大島郡東山新田)	女房おつの、春に出生の男子、6月15日に死去、乳沢山あり、9歳になる久松、他に倅なし	男	生後3～5ヵ月		十二番

通番	年 月 日	発見場所	捨て子の性別（実子と性別が異なる場合*）	捨て子の年齢	貰い人	貰い人の養育理由	実子の性別	実子の死亡年齢	備考（捨て子死亡など）	出典（既刊分は記事番号記載）
14	1824〔文政7〕年 12月18日 朝六ツ時過	居宅東堀通り 土蔵入口前	女	当歳	百姓作平衛（岸本武大夫代官所河州松田郡猪口村）	女房ざん、昨年2月出生の女子、12月12日に病死、乳沢山あり、8歳になる小作次郎と将来「妻合」せたい	女	生後1年 2ヵ月		十二番
15	1846〔弘化3〕年 5月5日 朝六ツ時過	本家軒下	男*	当歳	百姓仁兵衛（摂州西成郡加嶋村）	女房いと、4月13日出生の女子病死、乳沢山あり、成人の後、家名相続させたい	女	生後1ヵ月 以内	他に6歳になる女子1人あり	十四番
16	1852〔嘉永5〕年 6月15日 暁六ツ時頃	本家軒下	女（死亡）	当歳	百姓七兵衛（摂州川辺郡東長州村）	3月出生の女子、5月13日死去、乳沢山あり、養女に貰いつけ成人の上、家名相続させたい	女	生後6ヵ月	すえと名付け大切に養育、11月13日から「乳汁引不申」、驚風病で17日暁に死亡	十五番
17	1852〔嘉永5〕年 11月晦日夕、12日1 日暁六ツ時過頃	居宅軒下、南蛮蔵の前	女（死亡）*	当歳	百姓治右衛門（河州丹北郡矢田部村）	女房てふ出産、10月15日死去、乳汁沢山あり、養女に貰いつけ、成人の後、家名相続させたい	男	生後1年 未滿	嘉永6年5月25日病死	十五番

表2 小林家文書の捨て子記事、実子を亡くして捨て子を貰い受けた事例（大阪市立図書館所蔵、小林家文書より）

通番	年 月 日	発見場所	捨て子の性別(実子と性別が異なる場合*)	捨て子の年齢	貰い人	貰い人の養育理由	実子の性別	実子の死亡年齢	備考(捨て子死亡など)	小林家文書目録文書番号
1	1782(天明2)年1月13日	銭屋長兵衛借家(御池通5丁目)	男	当歳	扇子屋清五郎・女房とめ(御池通5丁目)	前年12月出生の倅、10月中死亡	男子	生後10ヵ月		雑・捨て子134-1
2	1813(文化10)年間11月11日	銭屋長左衛門軒下(御池通5丁目)	女	当歳	百姓与八・女房(摂州領浄土寺寺門)	10月出生の女子死亡、将来は現在4歳の息子と夫婦に	女子	生後1ヵ月		134-9
3	1814(文化11)年9月28日	高津屋卯八貸屋(小浜町)	女(死亡)*	当歳	津邦久兵衛・女房幸(南綿町笹屋太四郎借家)	倅、熊治郎を9月29日に亡くしたため	男子		「とよ」と命名、11月18日発病、19日死亡	捨て子・迷子135-1
4	1846(弘化3)年8月29日	幸町5丁目吉橋南詰大通	女(死亡)	当歳	能登屋平蔵・女房むめ(幸町播磨屋忠四郎借家)	4月12日出生の女子死亡のため	女子	生後4ヵ月	「はな」と命名、弘化4年13日痲痘のため死亡	134-5
5	1847(弘化4)年6月28日	奈良屋忠兵衛居宅軒先(御池通5丁目)	男(死亡)	当歳	百姓佐吉・女房そよ(河州若江郡中小坂村)	前年10月21日出生の男子が本年7月5日病死、ほかに14歳の女子あり	男子	生後8ヵ月	「藤吉」と命名、疳疾にかかり10月29日死亡	135-2
6	1848(弘化5)年2月晦日	日向屋藤九郎借家ろく(御池通6丁目)	男	2歳	池田屋徳兵衛・女房もと(吉田町播磨屋利兵衛借家)	弘化4年11月18日出生の男子徳松が嘉永元年3月20日に死亡したため	男子	生後4ヵ月		135-3
7	1851(嘉永4)年2月20日	河内屋重右衛門居宅軒先(御池通5丁目)	男*	当歳	百姓清兵衛・女房もと(摂州川辺郡塚口村)	嘉永3年8月出生の男子が12月下旬に病死したため	男子	生後4ヵ月		134-8
8	1853(嘉永6)年3月6日	瀬戸屋九蔵居宅軒先(御池通5丁目)	女(死亡)	2歳	河内屋佐兵次・女房とみ(摂州西成郡難波村東之丁)	嘉永5年11月出生の女児、嘉永6年2月病死のため	女子	生後3ヵ月	安政元年12月24日発病、安政2年1月7日死亡	135-5
9	1859(安政6)年8月5日	和泉屋利三郎居宅軒先(御池通5丁目)	女*	当歳	御頼塚屋豊吉・女房たけ(摂州川辺郡伊丹植松村)	6月出生の男子が7月に病死したため	男子	生後1ヵ月		134-13
10	1860(万延元)年12月12日	分銅屋英助支配借家露地(御池通5丁目)	男(死亡)*	2歳	百姓三郎兵衛・女房うの(摂州川辺郡高田村)	9月出生の女子が10月病死したため	女子	生後1ヵ月	文久元年発病、11月3日、驚風病で死亡	134-14
11	1862(文久2)年8月9日	和泉屋美ち(御池通5丁目)	女	2歳	丹波屋与市(近衛殿御家領摂州川辺郡植松村)	文久元年9月出生の男子、文化2年7月病死のため	男子	生後10ヵ月		雑件5-2
12	1862(文久2)年10月17日	奈良屋忠兵衛借家軒下(御池通5丁目)	女(死亡)	当歳	百姓清五郎(摂州西成郡加嶋村)	同年1月出生の子が8月に病死したため	?	生後7ヵ月	文久3年正月3日腫物発病、2月10日に死亡	134-15
13	1863(文久3)年1月23日	奈良屋忠兵衛借家軒下(御池通5丁目)	女(死亡)	2歳	百姓五郎兵衛・女房かね(摂州川辺郡小中嶋村)	文久2年7月出生の女子が12月病死したため	女子	生後5ヵ月	2月18日肝癆発病、胎毒が出て2月24日に死亡	134-15
14	1863(文久3)年9月25日	奈良屋忠兵衛借家軒下(御池通5丁目)	男(死亡)*	当歳	百姓平吉・女房さき(摂州川辺郡戸之内村)	8月出生の女子、同月に死亡したため	女子	生後1ヵ月未満	10月25日痲痘発病、11月17日驚風・虫病おこり死亡	捨て子・迷子135-7

図4 捨て子の貰い先

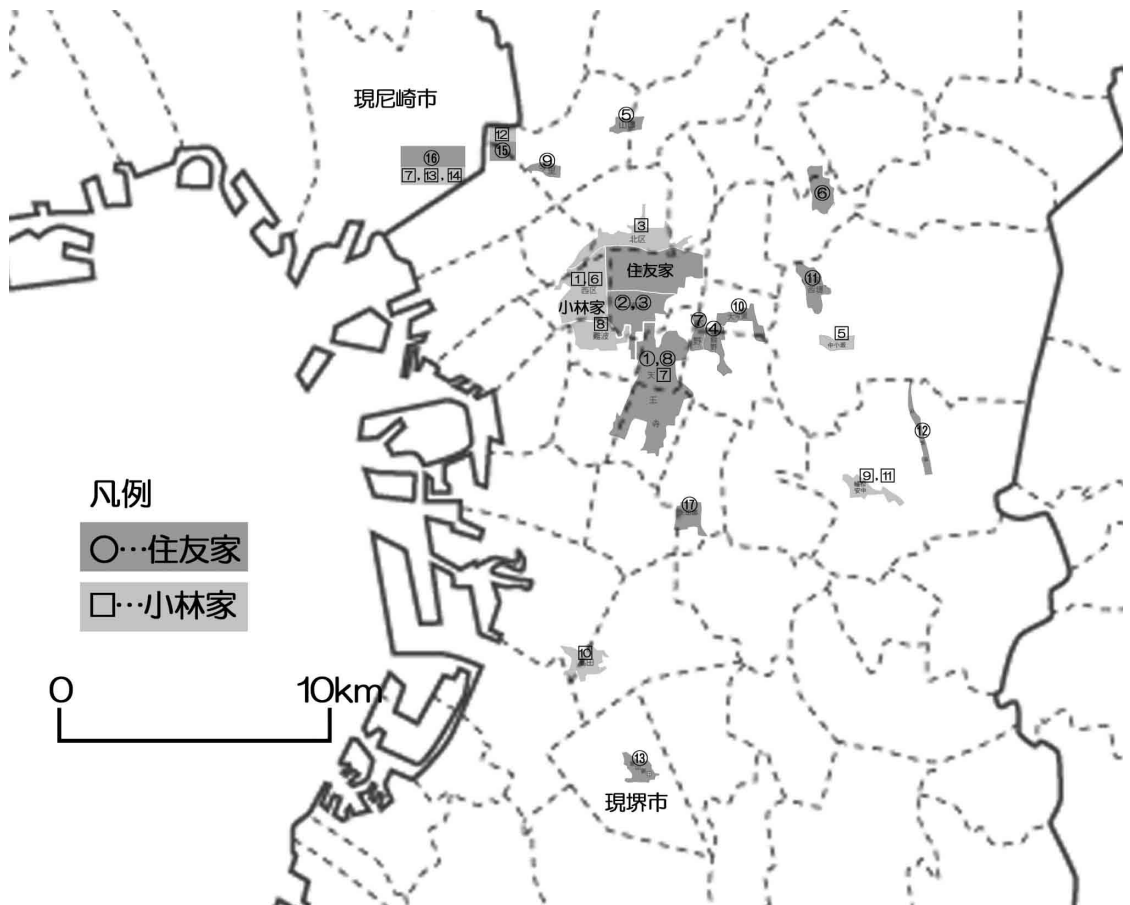


表7 貰い人住所一覧

住友家文書 *太字は現住所(図4の)

- 1、摂州東成郡天王寺村西堀越町大工善右衛門借家河内屋市兵衛：**大坂市天王寺区**
- 2、南綿町油屋利兵衛かしや今津屋久兵衛：**大阪市南区**
- 3、南瓦町伊勢屋次郎吉借家八百屋京蔵：**大阪市南区**
- 4、摂州東成郡猪飼野村百姓九平衛：**大坂市生野区**
- 5、摂州西成郡山口村百姓利平衛：**大阪市東淀川区**
- 6、摂州河辺郡浜村百姓市右衛門：**大阪市鶴見区**
- 7、摂州東成郡木野村百姓弥八：**大坂市天王寺区**
- 8、摂州東成郡天王寺村梶川町瓦屋喜平衛借家百姓長七：**大坂市天王寺区**
- 9、摂州東成郡今里村百姓源右衛門：**大阪市淀川区**
- 10、摂州東成郡大今里村百姓又右衛門：**大阪市東成区**
- 11、岸本茂十郎代官所河集若江郡川俣村百姓久佐衛門：**東大阪市**
- 12、大久保加賀守様御領分河州若江郡山本新田百姓孫兵衛：**堺市**
- 13、久世長門守様御領分泉州大島郡東山新田百姓朝右衛門：**堺市**
- 14、岸本武大夫代官所河州松田郡諸口村(注：茨田郡諸口村)百姓作平衛：**大阪市鶴見区**
- 15、摂州西成郡加嶋村百姓仁兵衛：**大坂市淀川区**
- 16、摂州川辺郡東長州村百姓七兵衛：**尼崎市**
- 17、河州丹北郡矢田部村百姓治右衛門：**大阪市東住吉区**

小林家文書 *太字は現住所(図4の)

- 1、御池通5丁目扇子屋清五郎、女房とめ：**大阪市西区**
- 2、摂州領浄土寺寺門(百姓与八、女房)：**大阪市住吉区**
- 3、南綿町笹屋太四郎借家津邦久兵衛・女房幸：**大阪市南区**
- 4、同町内播磨屋忠四郎借家能登屋平蔵、女房むめ：**大阪市南区**
- 5、河州若江郡中小坂村百姓佐吉・女房そよ：**東大阪市**
- 6、吉田町播磨屋利兵衛借家池田屋徳兵衛・女房梅：**大阪市西区**
- 7、摂州川辺郡塚口村百姓清兵衛・女房もと：**尼崎市**
- 8、摂州西成郡難波村東之丁河内屋佐兵次・女房とみ：**大阪市南区**
- 9、摂州川辺郡伊丹植松村御頼塚屋豊吉・女房たけ：**八尾市**
- 10、摂州川辺郡高田村百姓三郎兵衛・女房うの：**堺市**
- 11、近衛殿御家領摂州川辺郡植松村丹波屋与市：**八尾市**
- 12、摂州西成郡加嶋村百姓清五郎：**大坂市淀川区**
- 13、摂州川辺郡小中嶋村百姓五郎兵衛・女房かね：**尼崎市**
- 14、摂州川辺郡戸之内村百姓平吉・女房さき：**尼崎市**

表8 捨て子の里親候補者事例（小林家文書） ＊貰い親は太字

事例1（事例番号5）

弘化4年（1847）6月28日 奈良屋忠兵衛居宅軒先 当歳の男の捨て子

口入 松屋半兵衛

摂州鴨下郡吹田村 百姓安治郎（31歳） 女房みつ（30歳）

弘化4年2月20日出生の女子、7月11日病死（生後4ヵ月） 乳沢山あり

河州若江郡中小坂村 百姓佐吉（45歳） 女房そら（40歳）

弘化3年10月21日男子出生、弘化4年7月7日病死（生後8ヵ月） 乳沢山あり、他に10歳の女子1人あり

摂州西成軍光龍寺 百姓岩一（35歳） 女房ふき（30歳）

摂州西成郡 御弊嶋村百姓 宇平衡（39歳） 女房みき（30歳）

弘化4年2月出生の女子、7月2日に死亡（生後5ヵ月か）

松山町大和屋平兵衛借家 安田屋弥平衡（39歳） 女房みつ（33歳）

弘化4年2月5日出産の女子、2月15日病死（生後10日） 乳沢山あり、他に子なし

泉州大島郡毛穴村 百姓吉郎平衡

事例2（事例番号6）

弘化5年（1848）2月晦日 日向屋藤九郎借家ろうじ（御池通6丁目）2歳の男の捨て子、

口入（京町堀4丁目）けたや

池田屋徳兵衛、女房もと

百姓佐兵衛（38歳） 女房ゆき（33歳）

同年正月男子出産、2月上旬死亡（生後2ヵ月） 乳沢山あり、「男子入用」

百姓善兵衛（40歳） 女房とみ（32歳）

同年正月出生の子、下旬に病死（生後1ヵ月未満） 乳沢山あり、「男子入用」

百姓庄蔵（33歳） 女房むめ（27歳）

娘死に、乳沢山あり、「男子入用」

事例3（事例番号7）

嘉永4年（1851）2月20日 河内屋重右衛門居宅軒先口当歳の男の捨て子

口入 備後5丁目、明石屋貴兵衛 捨て子貰い口三軒とも神崎渡し向い在所

摂州川辺郡清水村百姓清吉（43歳） 女房（38歳）

嘉永3年5月実子出産、嘉永4年正月上旬病死（生後8ヵ月） 乳沢山あり

摂州川辺郡塚口村百姓清兵衛（46歳） 女房もと（42歳）

嘉永3年8月実子出産、12月下旬病死（生後4ヵ月）「乳汁今二沢山二御座候」

摂州川辺郡額田村百姓茂兵衛（32歳） 女房とよ（28歳）

嘉永4年正月上旬出生の女子、正月下旬病死（生後1ヵ月未満）